

ただキリストと共に歩む

# 水戸無教會

第2号

編集 半田梅雄

## 弟子と使徒

半田梅雄

福音書に於けるイエスの弟子たちと、使徒行伝二章以下に於ける使徒たちの關係を知ることは、今日の社会に於ける牧師、宣教師その他伝道者職とする者と、平信徒との關係を知る上に極めて重要なことと思ふ。

先ず、使徒について考えてみると、彼らはイエスの生存中からの弟子であつた。然し彼らが本當に信仰者としてイエス・キリストの証明を行えるように力強くなつたのは彼らに聖靈が降つてから後のことである。

聖靈が与えられる前と後の重要な変化は、弟子と使徒という表現がよくこれを物語るように思ふ。福音書にあらわれる彼らは弟子であつて、この世に於ける先生と生徒の關係という匂いが非常に強く、

その力も甚だ弱い。ところが使徒行伝は文字通り使徒 (apostle) の伝記であつて、別名聖靈行伝というにふさわしく、一人々々が神によつて召され、神によつて遣わされたものとして大いなる働きをなしている。

使徒の原語 ἀποστόλος は ἀποστέλλω なる動詞より出た名詞であつて、この動詞は「使者を遣る」を意味する。さればアポストロスは遣わされし人、使者、特使を意味する、即ちキリストより此世への使者、キリストの大使という意味である。内村 ロマ書研究

このことは今日の教会に於て牧師や宣教師の云う事を聞いて洗礼を受け、聖さん式に

列席する人々がすべて眞のクリスチャンであるということの意味しない。それは教会や教団に所属するという点で特定グループの一人であり、又その牧師宣教師から教えを受ける故にこの世的な意味で牧師宣教師の弟子ではあるかも知れないが、それは即キリストの使徒を意味しない。

我々は教会の門をくゞつたことがなく、洗礼も受けず聖さん式に列しないから牧師の弟子、宣教師の生徒ではないが、キリストによりすべての罪を赦され救われたものである。このことは全世界の人々が否といふとも神はこれを是とし給う。然も罪のゆるしと共に我らは、聖靈によつてキリストの大使としての大任を与えられて、この世に遣わされたものとなつた。働かざるを得ないのは実にこの為である。感謝であり、光榮である。

# 神の国は受くべきものなり

## 松本文助

この句は幾年か前に塚本先生から聖書表紙裏面に書いて戴いたものである。教会信者であつた私は、教会のために働くこと、その集会に出ること、伝道をして教会に人を導くこと、聖書を勉強して通読すること、献金の多いこと、慈善をすること、などがクリスチャンの義務であるかの如く実行に努めようとしたのであつたが、何一つできなかった私は却つて他人を羨望し、一人淋しさを感じたのであつた。このさもしい気持は幾分この句によつて慰められた。

神様の国では与えるのではなく受くべき処であるとおもうと、何と気軽さを感じたことか。

昭和二十四年一月四日郷里に向う車中のことであつた。スチームも通らない冷え切つた朝まだき寒さのあまり黙禱し始めた。その所の中に心の奥深くに「ただ受けなさい」と云う声があった。

それはかすかな、いまにも消えそうで気づかないくらいであつたが、日が立つに従つてその声は鮮明で且力強く拡大して私を支配し始めたのであつた。そしてこの句がヨハネ伝一の一二節の「これを信

ぜしものすなわちこれを受けしものは神の子となる権を与え給へり」の聖句を意味するのであるとわかつて歓喜したのであつた。然し聖書研究のために家を出かけると、お前の罪はその資格があるか、よし現在とはともかくも過去のお前のあの罪この罪はどうした。私は短刀を突きつけられた人の如くなつた。然し「ただ受けなさい」と云う声はカ

ンフル注射の如く蘇生のおもいであつた。斯る罪の中にキリスト・イエスの十字架の贖罪によつて罪なきものとみなしてくださる神の御意をなぜ受けないのかと気づいたときに永い間蘇らずにいたパウロの「噫われ悩める人なるかな・・・我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝する」(ロマ書七ノ二四、二五)

と百八十度の転換しての感謝が自分の感謝となつて絶叫した。

神様が独子イエスを十字架につけてどんなやくざな人間でも罪ないものとしてくださったこの御意を受けるものを義とし給うと。また神の子の権をあたえ給うと。何たる恩恵でありましょうか。この恩恵を受けたパウロは主イエスの名のために死ぬることおも覚悟し(使徒二一ノ一二)あの偉業はなされたのであつた。ルーテルまた然り、内村鑑三また然り、福音なるかな、福音なるかな、実に「神の国は受くべきものなり」である。

# 「祈り（二）」

大森孝夫

「主よ、祈ることを我らに教へ給へ」（ルカ二／一）

私は前回において肉に弱き私の「祈り」とは、「わが罪許し給え」と全身全霊をあげて天に在す父なる神を呼び求め、その御前にうち伏して泣く、その「叫び」声であると告白いたしました。しかし私の「祈り」は常に神の御旨にかなう眞の「祈り」でありましょうか。私はかく考えるとき、強く強く恐れおののかざるを得ないのであります。たしかに「祈り」とは活ける神との交りであり、神えの言葉

ではあります。神の御心をかえりみるこゝとなしには絶対に、神と交る事は出来ないのだと信じます。「祈り」、生ける神との交り、それなくしては私たちの存在はあり得ません。従つて私たちキリスト者は「神の御旨にかなない、神の聴き入れ給う眞の「祈り」に就いて、命がけで学ぶと共に、「教へ給へ」と心をこめて祈り求めなければならぬのであります。以下私は、このまことの「祈り」を学ばべく筆を進めて参りたいと存じますが、この際第一につき当るべき問題は如何にして眞の「祈り」は学ぶことができる

かと言う点であります。このために私たちは教会を通じて牧師の説教を聞かなければ駄目でありましょうか。また大冊の神学書をひもとかなければ不可能でありましょうか。いや、いや、私たちは絶対にかかるものに迷う必要はないのであります。私たちキリスト者は全身全霊をあげて主イエス・キリストに学び、祈り求めればそれで完全なのであります。なぜならキリスト教はイエス・キリストであり、私たちキリストの僕であり、私たちはただイエス・キリストを信ずることによつてのみ生きることを与えられているからであります。そして私たちはイエス・キリストによつてのみ眞理の何たるかを知り得るのであります。「祈りの本

質」とは「キリスト者の祈り」であり、「キリスト者の祈り」とはイエス・キリストの「祈り」とは生活とに根源していることを深く深く信じているからであります。さて、信仰もて福音書を学ぶとき、私たちは如何にイエス・キリストが「祈りの人」であられたかに心を強く、強く打たれずにはおられないのであります。ヨルダン川にてバプテスマを受けられたとき、ガリラヤ伝道するとき、十二使徒を選ばれたとき、奇蹟を示されたとき、またヘルモン山上に、ゲッセマネの園に、遂には十字架の上にと常に「祈り」を続けられたのであります。実にイエスにとつては祈ることは生きることであり、生きることは祈ることであられたのであります。

# 荒野についての序論(二)

石原秀志

もと砂漠の宗教として成立したイスラエル宗教が、カナンの沃地に向つた時に、課題として与えられたのは沃地の文化との対決であつた。「イスラエルの砂漠より沃地への移動は単なる場所的移動ではなくて、歴史の神の導きとして自覚された」ものである事を関根氏は説いておられるが、此の自覚、換言するならば信仰による決断が、約束の地、乳と蜜との流るる地であるカナンに向わしめたのである、同時にその地の文化との対決を迫つたのであつた。

既に述べたように、文化は大なり小なり自然の支配が可能となる肥沃な土地(Kulturland)の生み出したものであつた。従つてもと文化を生み出す契機をもたなかつたイスラエルがカナンの沃地に移つた事は、その沃地のもつ豊かな生産性—その具体的展開としての文化をば如何に解釈し、いかに理解し、いかに摂取してゆくかと言う課題を担つた事であり、唯之と対立し、之を排撃する事によつて信仰の純粹さを堅持しようとしたレカブ人の名によつて知られる一部の人々(エレミヤ書三五章)の保守と偏狭とを

そのまま認める事は出来ない事であつた。その信仰の貞節に於て充分学ぶべき点があるにせよ。

四十年にわたる荒野の遍歴も、漸く約束の地に入るを許されて後の王国の建設とその分裂、亡国と捕囚と言うその歴史も、究極に於て絶えず此のような沃地の文化との接触による生産Ⅱ産業の問題を、その信ずるヤーウエの神への純粹なる信頼と服従に徹する事に於て解決することを迫られて行つた過程であつたと言えよう。「乳と蜜との流るる地」はイスラエルの荒野或は出エジプト以来の最大の希望であつた(出エジプト二章八節、ホセヤ二章一四—一五等其他参照)。此の希望の故にこそ、幾度、幾十度と背反、失敗、後退を繰返し、エジプ

トの肉鍋に心を惹かれ乍らも、四十年の苦しい彷徨を経て遂に約束の地に到達し得たのであつた(申命記八章)。然しそれは希望の完全なる成就ではなくして、尚其処に多くの戦うべきものが残されて居つた。戦は彼等を取り巻くカナン周辺の諸族との間に進められたのみではなく、イスラエル自身の内部に於ても続けられねばならなかつた。此の戦を彼らは数百年に亘つて戦い続け、ついにその戦に敗れ、亡国の悲運に遭遇するに至つた。それは外見的に云えば「沃地文化との対決に敗れた」ことを意味するが、然しその戦を通じて益々歴史的信仰の意味を自覚し、人類の新たな歴史を創造することに参与した(関根氏)のであつた。(未完)

# 讚美歌のあゆみ (一)

半田 信子

一五四九年(天文一八年)ザヴィエルが鹿児島に渡来してより布教の進むところラテン語の各種の讚美歌が歌われ詩編が誦えられたであろうと思われる。記録によると一五

五二年(天文二十二年)の降誕祭に周防山口に於て行われた歌ミサ *missa cantata* を挙げたのが式として最も早いものである。一五六五年(永禄八年)には典札に際して主禱文、使徒信経、アベマリヤをラテンでその他は日本語で合唱したことが記録されている。

プロテスタントの賛美歌

一八五三年アメリカのペリー提督がその艦隊を率いて浦賀に來航したとき、投錨三日目の日曜は幕吏の來艦を拒んで旗艦上に礼拝を行ったが

その時特に選ばれ唱和された讚美歌は六五番(新五)でありその歌声と軍樂隊の伴奏は海岸にまで響いたと言われている。

一八五八年(安政五年)通商条約が締結せられると宣教師たちが相次いで來朝、ここにわが国プロテスタント教会の布教が開始させられた。聖書の邦訳はすでに試みられ、一八七二年(明治五年)にはヘボン訳福音書の開版を見て

いるほどであるが、翌年のキリシタン禁制高札が廃止されるまでの十数年間の所謂非法的な秘密集会時代にあつて讚美歌を唱う事は危険をとまなうことであつたし、洋楽曲に合わせて歌うべき歌詞の原本となるべきものがそれまでの日本に皆無であつたこと、

或は当時の新信徒は多く教養の高い階級であつただけに歌を歌う事はむしろはしたないことと思つていたし又第一義的教書でもないせいもあつて讚美歌の翻訳のことは比較的遅れた。

一八七二年(明治五年)九月二十日横浜に於ける最初の宣教師会議において邦訳讚美歌のことが話題に上り二つの試訳された讚美歌が提示された。一つはクロスビー女史がもう一つはゴープルが翻訳したものであつた。この會議に本願寺の間諜として横浜教会に潜入していた正木護の報告書によると

エスワレラ愛シマス サウ聖書申シマス

彼ニ子供 信ズレバ屈ス

ハイエス愛ス ハイエス愛ス

ハイエス愛ス サウ聖書申ス

(以下略) (現在の讚美歌四六七番)

右ハ此度音律調子を合せ和語ニ直訳シ婦女子小童ヲ誘引スル為ニカツ直訳再稿ノ上出版致ス由ナリ、とある。

両歌共に來朝後間もない宣教師の独力になる未熟な日本語の翻訳であり、直訳というよりは外人の片言的用語そのまま原詩そのものが単純な幼児向きの教訓歌にすぎず、その翻訳また文学としては論ずるに足りぬものの讚美歌の萌芽、新体的なるものの萌芽として日本讚美歌史上珍重さるべきであらう。(つづ

く)

ヨキ土地アリマス タイソフ遠方

尊者栄華ニ立ツ 日出ノヨウアアカレウマク 主牧者ホメル

名拳ゲ高ク 讚美歌セヨ(以下略)

六七番)

# 朝 礼

## 小 貫 武 壽

ふとしたことから、うちの店でも毎朝朝礼をしようじゃないかと言う声が出て、十人ぐらいづつ集まって始めることにした。

専任講師は私、何時も勉強が足りないから気の向かない時は「おはよう」の挨拶だけ、下手な話だけでも何とか皆真面目に聞いてくれる。

私の様な少し間の抜けた人間の話を皆が真面目に聞いてくれるかと思うと嬉しい様な、また反面気の毒な気持ちがある。併し今の場合、やっぱり私がやらなければならぬ立場に立たせられてしまっている以上、一生懸命やろうと思っている。

願わくば、之によつて皆の精神が少しでも聖められ、人生にプラスしてくれるならば幸いである。

私も語るためには日常の生活に乱れた、また意気地のない態度をすることが出来なくなるので、自然に責任を感じて生活に張りを生じてきた。私はこの習慣は特殊な事態の起らない限り、ずっと続けたいと今思っている。特に私として嬉しいのは、日曜日である。此の時は私は皆に我慢してもらつて―我慢でなく喜んで聞いてもらえるようになるの良いのだが―キリスト教の講義を簡単にやることにしている。人生の真理を判つても

判らなくても静かに聞いて貰える機会を例え十分でも与えられた事は、我々鶴屋の社員にとつて偉大なる恩恵であると私は思う。

週に十分間としても一年には五十三週あるから五百分、時間にして九時間の勉強である。此の時に播かれた種は何処かで芽をふくであろう。イエス様の聖句は一度覚える、何かの時に必ず出て来て私たちが悪に向うときのブレーキになる。願わくば神の真理を私が恐れずはばからず語ることを得る様に心から祈らざるを得ない。

人生の目的は何にあるのだろうか、金儲けがそうか、大臣になるのがそうか、大学教授になるのがそうか、否然らずである。人は皆自分の立場を優位にしようとしてあがい

ている。私自身もそういう気持ちでいることが多い。またうちの店自体の気運もそうである。併し、それは本末転倒なのである。

人にせられんと思うごとく人にも然なせ、人は神に仕え人に奉仕するのが目的である商売もまた然り、商業を通して人に盡すことであると私は思う。

### 日曜集会

毎日曜日午前十一時より  
水戸市東原町水戸幼稚園  
ガラテヤ書研究 半田  
ヨブ記研究 大森  
参加自由 但しヨブ記研究は  
午後昼食を共にした後です。

# 妻えの手紙

半田梅雄

菊池さんの成長と前進ぶりには全く頭が下がりました。

開拓に入ってから僅か五ヶ年ですが、彼は本当に立派な百姓です。組合長としての重職を裸一貫からやり抜いたからではありません。(勿論それも大変だが、)彼は心から土と人を愛しています。口ばかり達者な指導者の多い今の世で、彼のような立派な友人を持つことを私は誇りに思いました。

然し彼を本当に偉大にする道は唯一つだということを私は感じます。何故なら彼は――私もかつてそうであったが――キリストに従うこと

は外道であり、祖国と古い友を裏切る行為のように漠然と感じているからです。それは

実に大きな誤解です。キリストは決してバターとブドウ酒の中から生まれたものではありません。キリスト教的儀式や習慣の中にイエスはいない、そのことは御身が切実に知る通りです。凡そ人間の姿の中で眞に偉大なものはまことの謙遜です。而して眞の謙遜はイエスを通してのみ私たちが神より与えられる恩恵です。祈りましょう、私たちの敬愛する友人のために。

変転極らない歴史の流れの中にあって私たちはこれ丈は

変わることはない人生の基本原理に立つて歩んでいる。究極に於て私たちは永遠の未来のために生きているのではありません。今日唯今この刻々の現実そのもの、中に人生の意義と目的とが発見されなければ例えそれがどんな高遠な理想でも価値がありません。

何故なら人生とは昨日(過去)のことでも明日(未来)のことでもなく実に今日唯今のことだからです。今日を完全に生きる、それが人生に対するキリスト教の奥義です。永遠は今日の連続だと言うことを人は忘れがちです。今日の私たちが救ってくれないもの、どうして明日の私たちを救う力があるでしょうか。マタイ伝六章二五〜三四節に於けるイエスの言葉はこの眞理を率直に語っています。イエスの

福音が永久に福音であり、且福音であり得るのは、実にこの一点にかかっています。聖書が古くて新しい本だと云われのもこのことを意味しているのです。イエス・キリストは滅びた過去の人物ではありません。又人類の理想的人物として作られた観念的未来像でもありません。彼は未来永劫に私たち人間の今日を支配する方です。常に今いる人、在りありて永久に在る方です。

再び前の言葉を繰り返します。人生に於ける眞の偉大は全き謙遜であると。この全き謙遜についてマルコ伝一〇章四三節〜四五節及びマタイ伝一六章二四節〜二六節に於てイエスは、はつきりと述べています。謙遜は人の前にペコペコ頭を下げることではありません。

## 後記

ません。おのれの無力を徹底的に思い知らされた人、腰の骨をグダグダに打砕かれた人のことです。「我キリストと偕に十字架につけられたり。我生きるにあらず、キリスト我が内にありて生くるなり」とパウロはガラテヤ書二章で述べています。

イエスは全き謙遜の人でした。十字架の死は神えの全き従順によつてなされました。彼の現実、神に示された道をひたぶるに歩むこと丈でした。彼の全生命はこのことの為丈に燃えていました。

神によつて生かされていることを自覚せる者、この人は始めて隣人に対して（ ）ない同情を禁じ得なくなるのです。

本誌の創刊について早速各方面から祝詞や激励の便りをいただいで心から感謝申し上げます。その何れもが儀礼的なものでない丈に我らの磊びは押え難いものとなり、深い責任を痛感せしめられた。殊に石原兵永先生より二三人集会にこそ福音の眞理は輝くだろうと言う意味のお便りを頂いた時は思わず万才を叫んだ程である。病床よりの忠言の中には職業人の集いは病人と違つてそれらしい特色を發揮してほしいというものもあり、我らの信仰は家庭や職域において如何に生きていくか証すべきであると言うことを深く考えさせられた。「ムキョウカイ」は「いぶん難しい私たちの寄りつけない程高

いところにあるのではないかと思つていましたが、案外単純なんです」と言う教会しか知らない或る若い信者の言葉は私たちに限りない慰めを与えてくれた。一十二年前に、この水戸に無教会福音の第一声を放たれた鶴田雅二先生よりは「細く長く福音の戦いの良き器として発展を祈る」旨の激励をいただいた。思えば永い祈りの結実ではある。

この薄ぺらな冊子とも云えぬ「水戸無教会」誌が訪れてゆくその友、この兄弟、あの姉妹の上に神が常に平安と恩恵を豊かに与え給わんことを祈つてやまない。万物みな復活の期、我らの信仰も自ら躍動を禁じえなくなろう。然し少しく思いを内にひそめれば、福音の喜びは不動の営み

であり、生命は永遠の発展である。我らを常に育み給う主の榮光に季節的変化は無い。むしろ絶えざる祈りの中にこそ我らの生活の全てがある筈である。主のみ国の近きを愈々切に感じつつ切に求めつつ熱心に進みたいと希うものである。

四月一日石原兵永先生より「生けるキリスト」なる講演をして頂く機会を恵まる。時も可し、期して待つこと甚だ大である。(平田)

昭和三十年四月一日発行  
水戸無教会第二号  
実費 十円 千 八円  
編集兼印刷人 半田 梅雄  
発行人 松本 文助  
発行所 水戸市東原町四六四二  
水戸幼稚園内  
水戸無教会